心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ④

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。

マーくんが結んだ家族の想い

大阪に出て10年。仕事にも友人にも恵まれ頑張っていますが、よくないことが続き、いつになく実家が恋しく、岡山へ一時帰省しました。

私の教育係でとっても厳しかった祖母も1年前に他界し、今は両親と愛犬のマーくんが実家に住んでいます。マーくんは、久しぶりなのに尻尾をぶんぶん振っての大歓迎でした。一人娘も29歳にもなると、結婚、結婚と実家ならではの小言もありますが、それでも、実家は落ち着きます。

母から、「雨もあがったし、どうせ暇なんでしょ」と、マーくんの散歩を頼まれ、しぶしぶ出かけましたが、家を出れば、近所のおばさんにも会い、懐かしい風景に触れ、心が癒される自分がいました。

母から散歩ルートを聞いてはいたものの、急ぐわけでもないので、マーくんの行く方向へどんどん進んでみました。

すると、脇道を神社に入って行こうとします。小さい頃、境内でよく遊んだこれまた懐かしい神社です。

少し階段を上がって、お参りをすると、後ろから名前を呼ばれました。

ビックリして振り返ると…

宮司さんでした。

でもどうも、会ったことがないような…。

名前まで知ってらっしゃるので、私が忘れているだけだろうと失礼ながら、なんとなく話を合わせて聞いていると、

「マーくんを見て分かりましたよ。元気だった頃、毎日おばあちゃんが散歩の途中にお参りに来られていてね、大阪のあなたのことを心配して祈願なさっていましたから。こちらに帰って来られてたんですね。」とおっしゃいました。

「あ、…」と思わず声が出ました。

そういえば、おばあちゃんはマーくんの散歩係でした。

足腰の丈夫だった祖母とマーくんの散歩ルートを知らず知らずのうちに歩いていたのでしょう。

宮司さんは祖母から私のことを何度も聞いていて、**「本当は毎日、毎日気になるのだけど、つい顔を見ると心配が過ぎて叱ってしまうのよ」とこぼしていたそうです。**

私が知らないところで、私のことを想ってくれている――目の前に映る出来事だけが現実ではないのかも知れません。祖母や宮司さん、両親、近所のおばさんも、大阪の仲間にも大きな愛をもらっていました。

振り返ると、雲の隙間から夕日が差し込み、瀬戸内の海がきらきらと輝いていました。

帰り道、夕焼けの中、おばあちゃんと一緒に散歩しているような温かさに包まれ、自然と涙がこみ上げてきました。

いつも厳しく、何かにつけては喧嘩ばかり祖母としていました。大阪に出るのも大反対だったのに、そんなに気にしていてくれたなんて…。こんな形で祖母の想いを知ることになろうとは、今でも信じられない出来事でした。

悲しいでも、嬉しいでもない、今まで経験したことのない涙が止まらず、家に帰るのにちょっと遠回りをした雨上がりの夕方でした。

あなたの町のアーバンホール

愛というのは、どれだけ多くのものを与えたかではなく、
そこにどれだけの思いやりが注がれたか、ということなのです。

マザー・テレサ

愛の人、マザー・テレサは形あるものを示すことが愛であるとは言いませんでした。人を思いやる心から全ては生まれ、注がれると説いています。思いやる気持ちがあればこそ、それが行動となり、結果、形を成すこともあるかも知れません。身近な人の立場に立ち、心から思いやること。今日から始めてみませんか？

葬儀・法要・ギフト **アーバンホール**

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。